
僕と天使と

崎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と天使と

【Nコード】

N9461C

【作者名】

埼

【あらすじ】

母親の死と共に心に少しだけ傷を負った少年、如月歩。そんな彼の前にある少女が現れる。彼女は不敵に笑って言う。「私は天使よ」と。

第1話 「……だるっ」

……ねえ、お母さん。

僕、つよくなったんだよ。

この前ユウがいじめられてるときにイジメッコをおいかえしてやったんだ。

母さん言ってたよね。

だれかをまもれるようにつよくなるのよって。

僕、泣かなくなったよ。

ころんでひざごそつをすりむいたときだって、先生におこられたときだってずっとがまんしてたんだ。

母さん言ってたよね。

お兄ちゃんになったんだから泣かないのって。

……ねえお母さん。

僕、まだよわいのかな？

僕、まだ泣き虫なのかな？

ほんとにまもりたかった人をまもれなくて、泣かないようになんしてるとなみだが止まらないんだ。

ねえ、お母さん。目をさましてよ……。わらってよ……。なにかはなしてよ。

ボク、さみしいよ……………。

夢心地とは意味としては気持ち良い、とか心地良いなどと解釈して構わないだろう。

だが、大抵夢を見ているときは深い眠りにについているため起きるのは非常に億劫である。

それを全力で体現している少年がここにいた。

少年の名前は如月歩^{（かきづきあゆむ）}。先程の夢の主人公にしてこの物語の主人公。現在、ベッドの上で目を緩慢にしばたたせている高校二年生である。

しばらくベッドの上で上半身を起こしたまま動かなかった歩だがやがて観念したようにベッドから這い出すと一言呟く。

「……………だるっ」

歩は基本的に真面目な人間だ。早寝早起きを現代に体現する彼はここ一週間、覚えの無い疲労に悩まされていた。しかも日を追うごとにその度合いは酷くなっていく。

口をへの字に曲げながら枕元の時計に目をやる。

六時半、彼が起きるいつも通りの時間。

昨日寝た時間から考えても九時間は寝ている筈だが、如何せんダるさが抜けない。

「……………着替えるか」

観念したように呟き、寝巻きであるシャツのボタンに手を掛けた

ところで扉の向こう側から階段を駆け上がる足音が聞こえてくる。
リズムカルに響くその足音が扉の前まで来ると同時に扉が開け放たれ、人影が部屋に飛び込んでくる。

「朝だよおおおおおッ!!」

その人影が飛び込んでくると同時に着替え途中の歩に飛びかかる。その全体重をかけたタックルの前に抵抗すら出来ずに倒され、いつの間にか人影にマウントポジションをとられている。

「すばらしい朝だよ！お兄ちゃん!!!」

「……ああ、そうだね、優。すつきりお目覚めのすばらしい朝だよ」

飛び込んできた人影　　一つ年下の妹である如月優きよひら ゆいの毎朝の襲撃に辟易しながら答える歩であった。

とりあえず二階である自室を優を引きずるように出て一階のリビングに向かう。

階段を降りる度に後ろから『あう、あう』と声が聞こえるがいつものことなのでもはやツッコミはしない。

リビングのドアを開けるとエプロンを付けた中年男性がこちらを向き柔らかい笑顔を浮かべる。

「おはよう、歩くん、優ちゃん」

「………おはようございます、お義父さん」

「おはよう！お義父さん」

片手にフライパンを持った男性　　義父である如月大地きよはら だいちに歩はぎこちなく挨拶をする。

「すぐに用意できるからそこに座ってね」

「あ…、はい」

「はい」

もう片方の手に持っているさえばしでテーブルを指している大地に従い椅子に座り、隣に同じように優が座る。

如月歩は10年前から一緒に住み始めた如月大地に未だに馴染めない思春期の少年である。

10年前、急に現れたその男は常に笑みを湛^たえていた。

歩が喧嘩をして傷だらけで帰って来た時、優が一人迷子になってようやく見つかった時、母親と話している時、いつも、いつでも笑顔であった。

片親であった歩と優にとってどこまでも異質な存在であったその男は警戒的であると同時に好奇的でもあった。

8年前、どうやらその男に害が無いと悟った子供たちは少しだけその男に心を許していた。母親を横取りされた様な気持ちにもなったが、その男と同じように笑っている母を見て、それでもいいかと思っことが多くなった。

7年前、母親が死んだ。

全て 壊れた。

少年の心。少女の心。幸せな家庭。

6年前、少女が立ち直り、少年の涙がようやく乾きはじめていた。

その時、少年は一つの事実に気付く。

“あの男は母さんが死んだのに笑顔だった”

気付いた少年は憤激した。

“あの男は母さんが死んだのに悲しくないの？辛くないの？ねえ、何で笑っているの！？”

憤った少年が男から距離を取り始めた時、少年はある場面に出くわす。

いつも笑顔だったその男が母親の写真を抱くようにして声を殺し泣いていた。

少年の心の中にぶつけ所の無い気持ちが生まれる。

そして取ってしまった距離を今更縮めることが出来ずに中途半端な状態になってしまう。

そんな宙ぶらりんな関係は現在に至るまで続くこととなる。

「はい、お待ちどうさま」

その言葉とともにテーブルに置かれた料理は母親が生きていた頃と比べても遜色は無い。

「いつただきまーす！」

「…いただきます」

「ちよつといいかな？」

二人が各々の皿に手をつけ始めたのを見計らって大地は声を掛ける。

「なーに？」

「今日の夜、二人に大事な話があるんだ。……というかお願いかな」

どこか困ったような笑顔を浮かべる大地に二人は怪訝な顔をする。

「別に…構いませんが」

「そっか、よかったよ。今日は出来るだけ早く帰ってくるからね」

答える歩に心底ほつとしたように笑い大地は台所に向かう。

「大事なお話ってなんだろうっねえ？」

「さあ？見当もつかないよ」

しばらく黙々と朝食をとっていたが不意に優が疑問を口にした。

内心、『父さん、再婚することにしたんだ』とか言われたらどうしようかと思っっていたりするのを歯牙にも掛けず歩は味噌汁を啜る。

「どうしようか？』父さん、再婚することにしたYO』とか言われたら」

その言葉に虚空に向け盛大に味噌汁を吹く歩。

「ちよつ…！どうしたのお兄ちゃん！？」

「…や、何でも無い。ちょっと自分がサトラレなんじゃないかと思っただけだよ」

気管に入ってしまった味噌汁にむせながら誤魔化しのつもりで「飯をかき込み一気に朝食を終わらせる。」

「へんなの〜。まあいいけどね」

特に追及もせずに残ったソーセージを咀嚼し優も朝食を終える。

「じゃあ片づけておくからお兄ちゃんは制服着てきていいよ〜」

「ん、ありがとね優」

「感謝の気持ちは形で表して！」

その言葉とともに歩に飛びかかるが寝起きでもなければ着替えの途中でもない。

軽くないなして、優を避けるとさっさと二階へ上がる。

後ろから椅子を巻き込んで倒れる音と『ぐへっ』とカエルを潰した様な声が聞こえた気がするがたぶん気のせいだ。

部屋に入り、早々に制服に着替える。

学校に行くにはまだ早いくらいだがいつもの習慣で体が勝手に動く。

ネクタイを鏡を見ながら直しブレザーに付いた埃ほこりを落とす。

「後は、歯でも磨いて優を待とうかな…」

独り言呟きながら部屋を出ようとした歩だが不意にその動きを止め、机の上に置いてある古い懐中時計を手取る。

「忘れてた。ほんとに疲れてるんだな…」

手に乗った懐中時計を握り額にあてる。

ひんやりとした感触が額から全身に伝わる。

……母さん。

「…行つてきます。母さん」

歩は一言呟き懐中時計を胸ポケットに入れ部屋から出た。

第1話 「……だるっ」（後書き）

どうも、埼というヘタレ作者です。

この作品、スピリチュアルファンタジーに仕上げるつもりなのが
が実際どうなるでしょうか…？

路線どおりに進むかいささか不安です（笑）

今、現在執筆中の短編とクロスさせるつもりですのでそちらが完成
したらあらすじを改編し、その旨を書き込みたいと思います。

感想や評価を頂けると嬉しいです。

第二話 「プチ殺してやるわ」

白を基調としたオフィスにはスーツ姿の中年とおぼしき白髪の男性と流麗な金色の髪を長く伸ばした若い女性が立っていた。

その部屋はガラス張りの個室であり、外の部屋からは同情に満ちた視線が集中している。

中年の男性の方に。

女は手近にあったソファに腰を掛けながら先程男に渡された資料に目を通してている。

ふんぞり返りながら資料を見ていた女だったが段々と眉間に皺しかが寄って行く。

「で、なんで私が人間界したになんか行かなきゃいけないのよ？」

先に口火を切ったのは若い女の方だ。

その口調からは年上への遠慮やら配慮は一切感じられない。ただただ不遜である。

「そ、それはだねえ……」

ひどく狼狽したような声を出したのは相對している男性の方だ。気の毒になるほど発汗しているため、しきりに取り出したハンカチで額を拭っている。

「それは？何？」

威圧感を感じさせるその声に更に男は委縮する。

それでもこれ以上目の前の女の機嫌を損ねないように事情の説明を試みる。

「君の相方がね…、人間界に飛ばされちゃってねえ……。そう、そうだよ！悪いのは全部君の相方なんだよ！」

悪いのは自分じゃない。そんな心情をひしひしと感じさせる声だ。そんな必死な様子の中年男性の姿を見て周りの同情の視線が強くなる。

ちなみに彼はこの部署における最高責任者である。

「……………へえ、リオのせいなの」

長い沈黙の後、それを裂くようにして顕現されたのは深い怨嗟の声と薄黒いオーラだ。

そして、その顔には紅の三日月が広がる。

それに伴い目の前の男の体は彼の意志とは無関係に震え始める。

「待つてなさい……………リオ・テイル。プチ殺してやるわ」

両掌を広げてボキボキと音を鳴らしている女　　アンナ・レイ
ンはこの世の憎悪を一身に集結させたような笑みを浮かべてその部屋を後にした。

後には身を縮めて震えている彼女の上司である男だけが残っていた。

彼がその数日後にストレス性の胃腸炎で倒れたのだが、それは又別の話だ。

如月歩が通っている高校は家からほど近い『私立竜胆高等学校』
という学校である。

近くの交通の便も良く、学校のレベルも上々、進学率もかなり良
い。

学費は少々張るがそれを差し引いても周りの学生にとってはかな
り魅力的なのか受験者は年々増加している。

徒歩20分程の道を優と話しながら歩くのが日課となっている。

「あつ、優！おはよー！」

「おはよー！ミーちゃん」

「あつ、歩先輩！おはようございます！」

「うん、南ちゃん、おはよ

如月優の幼馴染である少し小柄な少女、なごいじょうみなみ 齋条南が結いあげた髪と
ともに盛大に頭を下げて歩に挨拶する。

齋条南は小中高校を優と共に過ごしている。それゆえ南は優の最
も辛かった時を見ており、折れそうな優の心を共に支えてくれてい
た。

今でも優の一番の親友である彼女に歩は感謝の気持ち絶えな
かった。

自然と挨拶を返す顔にも笑顔が零れる。

「あつ……えつ……と」

「ほらお兄ちゃん！ミーちゃんを誘惑しないっ！」

「ほお、妹の幼馴染を誘惑するとは歩も隅に置けないな」

「……僕がいつ誰を誘惑したって？ていうかいつの間近づいてきた
んだよ信哉」

「ふふふ……君は瞬歩というものを知っているかい？」

いつの間にか三人の傍に来ていた歩の友達である海藤信哉かいとうしんやは、ふつと得意げに笑った。

彼も斎条南と同様に歩の辛かった時期を蔭から支えてきた一人である。

「二人ともおはよう」

「信哉先輩おはようございます」

「信ちゃんおはよう！」

「はは、二人とも相変わらず元気いっぱいだね。特に優はうるさいくらいだよ」

「それはひどいよっ！！」

歩と遊ぶことが多かった彼にとって優は歩の付属品の様なものであった。

何をしていても優が歩のシャツの端を持っていたため共に遊ぶことも多く今ではほとんど兄妹のような関係となっている。

「それにしても…、君の眼の下のクマは一層酷くなっているな」

「ん？…ああここ最近、寝ても一向に疲れが取れなくてね」

「もし辛いようだったら保健室にでも行った方がいいな」

「そうだな…考えとくよ」

時折憎まれ口を叩く信哉だが歩のことは常に気にかけていた。

それほど件の時の歩の変わりようは酷いものがあった。

彼としてはそんな親友の姿を二度と見たくないと思っていた。

それからしばらく、取り留めのない話が続いた。

すぐ近所で起きた強盗殺人の話から大物スターの離婚騒動。果ては最近の経済の動きにまで話題は広がっていた。

これも話し好きの優と豊富なネタを持つ信哉がいてこそ成立するものであり、ほぼ聞いているだけの歩と南は時たま相槌を打っている以外はほとんど口を出さなかった。

まあ、猛烈に話している優と次々と話の内容を変える信哉についていけないだけなのだがもはや毎朝恒例のことなのでそれほど気にはならない。

熱っぽく最近のマスコミの動きについて語っている二人の背を見て溜息一つ付いて隣を歩く頭一つ低い南を見ると目が合う。

苦笑いを浮かべる歩とは対照的に頬を赤らめて俯いてしまう。

どうしたのかと南に声を掛けようとした歩は不意に振り向いた信哉に話を振られ出かかった声を飲み込む。

「…して、歩。今日うちのクラスに転入生が来るらしいぞ」

「……は？転入生ってこの前も来てなかったか？」

歩と信哉は同じクラスである。そしてつい数日前も同様に彼らのクラスに転入生がやって来ていた。

「またうちのクラスなのか？しかもこんな時期に」

今は10月になる。新学期などに新たな生徒が転校してくるのは珍しくないことだがこのような中途半端な時期に転入生が来るといふのは稀、というかおかしなことであった。

「だな。かなり変だ。しかもまた外人なんだとか」

「しかもまた留学じゃなく転入？」

「らしい。どっかの田舎から来たとかなんとか」

「この前転入してきた人って中国人なんだよね？」

そう、確か、かなりの秀才、容姿も良く、転入から一週間も経つ

のに未だに彼の周りは黒山の人ばかりである。

「李王照りおうていって名前だったよね？」

「優、よく覚えてるな」

「そんな変な名前そんな簡単に忘れられないよ！それに一年でもすごい人が来た、って噂が流れてるよ。ねっ、ミーちゃん？」

「…えっ？う、うん。そうだね」

話を聞いていなかったのか、かなり適当な相槌を打つ南にやや疑問を持ちながらも優は見えてきた学校の正門を指さす。

「じゃあ先に行くね！お兄ちゃん」

それだけ言うと南の手を取り走って行く優。

「あ…あのっ！また明日…」

「ん…？うん、また明日ね。南ちゃん」

引きずられながら、しかも俯くように話す南の言葉をかるつじて理解した歩が軽く手を振る。

走り去っていく二人を見送りながら二人も正門に向け歩き出す。

「…あの様子だと相当だな」

「ん？何が？」

小さくなっていく二人を見ながら呟く信哉に歩が聞く。

「そうだな、お前に問おう。普段元気な女の子が恥ずかしそうに俯いている。どうしてだと思っ？」

「……………お腹が痛いとか？」

「…ふむ、なるほど。度し難いな、君は」
「えっ、何で？」

かなり呆れた表情の信哉に理由を聞こうとする歩だが肩を竦められるだけで結局、教えてもらえずじまいであった。

第二話 「プチ殺してやるわ」（後書き）

第三話は短編小説を完成させた後に出そうと思っています。さて、遅筆な私ですからどれほど掛かることでしょうか…。感想やらコメントを頂けると嬉しいです。

第3話 「…気のせいかな？」

「憂鬱だ……………」

朝早いということもあり、人がまばらな教室で一人の男子が机に突っ伏しながら誰にともなくぼやいている。

「……………なんだ、藪から棒に」

後ろから聞こえてくる人生の悲哀を一身に集めたような声の前に座っていた男子が文庫本を置き、後ろを向く。

「…やはり人に囲まれるってのは慣れない。それに声が高くて鼓膜が破れそうだ」

眉目秀麗な顔を歪めながら李王照りおうていことリオ・テイルは長い黒髪を掻きながらぶつぶつと文句を言っている。

「だったら俺みたいに黙って座ってれば良い。いずれ周りも飽きるだろ」

リオの前に座っている男子 新庄志雄しんじゆうは眉間にシワを寄せながらリオに提案する。

「お前みたいになんかいつも仏頂面してられるか。…それになにか嫌な予感もする」

「嫌な予感だと…？ オイ、まさかまたあの変なのが出るってのか！？」

今まで小声で話していた志雄が声を荒げる。

本人が自称するようにいつも黙っていることが多い志雄の声に、少ないとはいえ周りの視線が一斉に集まる。

それに気付いた志雄は舌打ちをしながら黙り込む。

「とりあえず落ち着け。確かにそこらに臭いはするがしばらくは動きは無さそうだ。それにど

ちらかというと俺自身の身の危険が迫っている気がする……」

「……………なんだ、うちの親父にでもちよっかい出されそうなのか？」

「それは昨日出された。ベッドシートと掛け布団が全部ネコがらになっっていた……」

呻き声を上げながら答えるリオになんと声を掛ければいいかわからず志雄が言葉に詰まる。

現在、リオは志雄の家にホームステイという形式で居候をしている。る。

本来、転校扱いのリオが他人の家に居候するのはおかしいことなのだがそこら辺の問題は権力者である志雄の父親が叩き潰した。

そしてリオは人間ではない。

いわゆる人間が『悪魔』や『死神』などと呼ぶような幽体で、本来、天界などと呼ばれる人間界とは違う空間で過ごしているはずである。

では、何故リオは人間界に、ましてやホームステイなどしているのか。

簡潔に言えば左遷。仕事をサボっていたところ上司に見つかり、鉄拳制裁とともに社会的制裁ももらい、仕事場である人間界に墮とされることになったのだ。

「……それにしても、本当にあの『蟲』とかいうのは動かないんだろっな？」

「まあな。あいつ等が本格的に人間を襲おうとするときは、その少し前に強烈な臭いがするんだ。前はお前も何か感じたはずだ。今はそれが無い」

「……………あの甘い匂いか？あれがしなきゃ場所の特定は出来ないのか？」

「ま、そういうことだな」

悪魔であるリオの仕事は『蟲』と呼ばれる存在の撃滅である。

『蟲』というのは死した人間の残留思念が怨念にも似た力で変貌。異形となった者の総称である。

そういつた存在のほとんどが『高位霊体』という霊力の無い者、それに毛が生えた程度の者では見ることも感じることも出来ないため、噂になることはほとんどない。

また、悪魔である彼も高位霊体であるが現在は実体を取っているため通常の人間にも視認することが出来る。

ちなみに志雄は実体を取る前のリオの姿、蟲の異形も視認出来たほど霊感が高かった。

志雄が溜め息をつきながら壁に掛けてある時計を見て顔をしかめる。

「こんな時間か。もうそろそろだな……」

「ん？なんのこと……………」

意図が掴めない志雄の言葉にリオが何かを言おうとしたが、皆まで言えずに黄色い歓声に掻き消される。いわゆるリオのファンクラブだ。

我関せずの態度で前に向き直り、再び文庫本を読み始める志雄。きゃあああ、と歓声上がる隙間に、いやあああ、と悲鳴じみた声が聞こえるがどうやら完全に無視を決め込むらしい。が、不意に視線を上げて教室の入り口に目を向ける。

「……………気のせいかな？」

あの匂いがしたと思ったが、と呟きながら志雄は再び文庫本に目を落とした。

教室にはちょうど二人の男子生徒が駆け込んで来ているところだった。

「…結構ギリギリだったな」

「話に花が咲いていたからね」

まあ、話に花が咲いていたのは君と優だけだけどね、という言葉を飲み込みながら、歩は乱れた呼吸を直した。

「けど、本当に何でこんな遅れたのかなあ？　いつも通りに家を出たのに」

「……………さあ？何でだろうね」

頭に疑問符を浮かべながら聞いて来る歩に信哉は素知らぬ顔をして応える。

実際のところ、軽くふらつきながら歩く歩に、全員が合わせていたからだったりするが、結局走っても問題無かったので黙っていることにするらしい。

何故か一切息が切れていない信哉がさっさと自分の席につくと、その右隣に歩が座ろうとするが、机に足をぶつけて躓きそうになる。

「…だるいようなら授業まで寝てるといい。要点は後で教えよう」

「……………あはは、面目無い。とりあえずは大丈夫だよ」

ぶつかってずれた隣の空席を直しながら、ようやく席について一息つく。

傍目に見て、とても大丈夫そうには見えないが、それ以上の言及を避け、溜息をつく。

「どうしたの？ 溜息とは珍しいね信哉。あつ、おはよ歩君」

「おはよ、不動さん」

「…んん？ 愛理か。ま、いろいろ心労が溜まっててね」

クラスの隅で話していた女子グループから自分の席に戻って来た女子 不動愛理ふどうあいりが手をひらひらとさせながら信哉の前の席にいた。

「デリカシーの欠片も無いアンタが心労ねえ…。世も末だわ」

「そういうことを言うか？ どちらかというとお前の方が…」

「…何か言った？」

「や、何でもないです。何でもないですから足を退かしてください
いいいい！」

机の下で起こっている小規模戦争を見ながら歩は苦笑いを浮かべるが、不意にゆらりと視界がぼやける。しかし、歩はそれを強引に耐える。

(走ったのがまずかったか？ フラフラする…)

心臓の鼓動が早まるのを感じながらポケットをまさぐると、冷たい何かに指が触れる。

それを取り出し、手の中にある物を見て、目を細める。目に映るのは表面に龍が彫刻してある銀色の懐中時計。

(あははは…ほんとにどうしちゃったんだろうね。なにに入れてたかも忘れちゃうなんて…)

懐中時計を額に当てると少しだけ頭の中の靄もやが晴れる。

「…もう少し、あと少し大丈夫だから」

「……うえ？ らんか言っただか、歩？」

「どしたの歩くん？ あ！ なにその時計？」

足を踏まれるだけでなく、頬を掴まれている信哉と愛理に独り言を聞かれ、苦笑しながら答えようとした時、教室の扉が開き、担任の教師が姿を現した。

「よし！点呼とるぞ、席つけー」

「あ、先生来ちゃった。次の休み時間に見せてね、それ」

そう言っで一際強く信也の頬を引っ張ってから放すと、短かく揃えられた髪を揺らしながらくるりと前を向いた。

信也はつねられた頬を擦りながらその背中を恨めしそうに見ていたが、やがて諦めたのか歩の方を向く。

「…あいつの乱入ですっかり忘れてたが、件の転入生、何処をどう調べてもてんで情報が手に入らなかったんだ。ただ転入してくるってことしかわからなかった」

「……本当に？ 信哉が分からないって相当だね」

前の愛理と担任の教師に聞かれないように声のトーンを下げ話す信哉は顔をしかめる。

「……ありとあらゆる伝手つてを辿って見たんだけどね、一切不明」

「……謎は深まるばかりって訳か」

「よし、全員いるな。……で、かなり急だが今日から転入生が来ることになったぞ」

信哉と同じように歩も顔をしかめ、首を傾げるが、担任の言葉に反応して前を向く。

「……百聞は一見にしかず」

「……実際に見た方が速いよね」

「転入生だって！ 知ってたの信哉ッ!？」

教室が俄にわかに騒がしくなり、愛理が凄まじい勢いで振り向いたところで教室のドアが音を立てて開く。

しん、と静まり返った中、教室に入ってきたのは金髪の女子生徒であった。

陶磁器のような白い肌。アンティークドールのように整った顔立ち。まるで羽でも生えているのではないかと思えるほど軽やかな歩み。

窓から入った陽光がその一挙手一投足をまるでスポットライトのようにその女子生徒を照らす。

そのあまりの神々しさに生徒全員が呆気にとられ教室には先程とは違った意味で沈黙が落ちる。

その沈黙の中、それを齒牙にもかけず堂々と教卓まで向かうと生徒の方に向き直る。

「…あー、この子が今日から学校に来ることになった」

「アンナ、あまみや雨宮アンナっていうわ。よろしく」

教師の言葉を途中で遮り、腕組みをしながら傲然と自己紹介を済ませた女子生徒　アンナは値踏みするように席についている生徒たちを見やる。本来、そういつたまなざしで見られるのは転入生である彼女の方なのは今更言うまい。

空気が……唐突に変わる。生徒たち、教師までもが固まる。

目を細め、アンナは教室の端から順繰りに生徒を見ていく。その視線はまるで値踏みするようなソレ。

その視線が歩の所で止まる。そして、そこで声を出さずに唇を動かす。

『よろしく』

はっとしたようにアンナを見る歩だが先程の傲然とした態度からは考えられないほど柔和な微笑みを向けられ再び固まる。

その微笑みを次の瞬間には完全に消し去り、再び順繰りに生徒たちを見ていく。

そして再び視線が止まる。リオと志雄の席だ。

唯一、彼女の雰囲気飲まれていなかった志雄に興味深そうな視線を飛ばし、その後ろに座っているリオには歩に向けた笑顔とは質の違う笑顔を向ける。

その笑顔には明確な意思が込められていた。

『ぶっ殺してやるわよ、リオ』

簡単に言えば殺意である。

にこりと浮かべた笑みに含まれていた意味を悟ったりオの顔からだらだらと脂汗が流れ出る。

嗚呼…終わった、と虚空を見据えながら呟くりオを見てから、アナは視線を動かすが、すでに向けていた視線は教室の端にたどりついていた。

フンと鼻を鳴らして右手を目の前まで上げ、白く、美しく伸びた指を鳴らす。

瞬間、解凍されたように教室中がざわめき立つ。

「…あー、でだ。空いている席は…如月の隣か。あそこに」

「あそこに座ればいいのね」

教師の言葉を再び遮り、衆目の視線を一身に浴びながらもそれを毛ほども気にせず悠然と歩を進めるが、歩の隣にまで来てピタリと動きを止める。

「アンタ、もしかして……………」

「…え？」

歩はその言葉を最後まで聞くことなく、アナの方へと倒れ込み、意識を闇へと返した。

第3話 「…気のせいかな？」（後書き）

- 1・というわけで更新です。若干世界観を見せた所で終了です。いわゆるチラ見せですね（笑）
- 2・全体的な構想はジャンプの某死神漫画に影響されています。もちろん大元は変えてますのでFFにするつもりはありません（爆）
- 3・最近ちよつと小説執筆から離れていましたので、しばらくは更新を早めたいな〜とか思ったり思わなかったり。
- 4・感想・評価を頂けると嬉しいですよ。

第四話 「私は天使よ」

時は少し遡る。

アンナ・レインは天界にある自室で、人間界に降りるための荷造りをしていた。

小型のトランクにはその性格とは違い、几帳面に生活用品などが入れられている。

服などはすでに郵送済みであり、今手元にあるのは最低限の必要な物だけである。

とりあえずの用意を済ませ、ベッドの端に座って誰にもなく咳いていた。

ああ……面倒くさい、と。

「ふふふ、随分と参ってるようね」

不意に声が部屋に響く。その声に反応しアンナは声のした先に視線を飛ばす。

視線の先にはいつの間そこにいたのか、開いた扉に寄りかかったスーツ姿の妙齡の女性が笑みを浮かべて立っていた。

「……うるさいわね。こんな面倒なことに巻き込まれて喜ぶ奴なんていないわよ」

声を掛けてきた女性 部署内で彼女と唯一、まともに会話が

出来る先輩天使ユーリ・レスタの姿を見て彼女とは正反対に不愉快そうに顔をしかめる。

ユーリは自分の胸の前で腕を組みながら年齢不相応に可愛らしく首を傾げていた。

「いいじゃない？ その間、デスクワーク免除なんだから」
「人間界で起こった面倒事を全部押し付けられるなら、眠くなるよ
うなデスクワークの方が百倍マシよ」

鼻を鳴らしてベッドに倒れ込むアンナの姿を見てユーリは笑みを
深くし、アンナが寝転がるベッドの隣に腰を降ろす。

「大丈夫よ。せいぜい数年で戻って来れるし、指令もそんなに大変
なモノは無いわよ」

「……アンタ、なにを根拠にそれ言ってるのよ？」

「え？ 何ってもちろん勘よ」

ああ、もうこの女は……、と言い掛けてアンナは口を閉ざす。

隣にいるこの女性は、愚痴を言おうが嫌味を言おうが全く意に介
さない、抜けているのか、はたまた神経が異様に図太いのかよく分
からない生物であったことを思い出したのだ。

しかも笑顔がデフォルトなのだ。話している方が疲れる。

そう思い至り、アンナが再び溜息を吐きながらごろりと横を向こ
うとした時、ふとあることに思い至る。

「……私、何処に飛ばされるのかしら？ あの男、何も言わなかつ
たわね……」

「それはアナタが部長をいびり過ぎたからよ」

「あの男のタマが小さいだけよ」

そう言って、アンナは中途半端な体勢から一息に体を起こし、備
え付けのテーブルに向って歩き出す。

テーブルの上に乱立している書類の中、目当ての物を見つけたの
か大きめの茶封筒を引っ張り出す。

ほぼノンストップでその口を破り出したアンナの様子にユーリが笑顔のまま眉根を寄せる妙な表情をする。

「女の子がタマなんて言うものじゃないわよ……、って何をしてるの？」

「よく考えてみたら配置替えの書類、ちょっと前に来てたわ。……ああ、何すんのよ!？」

いつの間にかすぐ後ろまで近づいて来たユーリがアンナに抱きつくようにして書類を奪い取る。

「どれどれ……。……あーこれはまた微妙な、というか何処？」

「……どんな田舎よ、ここは？」

あまりに見慣れない地名が記されていた書類を見た二人は、その場で絡み合いながら固まっていた。

その書類には、こう記されていた。

『転属先：日本 県 蓮華市^{れんげし}』

舞台は再び教室に戻る。

不意に倒れた歩の身体をアンナが受け止める。

教室にいた人間のほとんどが事態を把握できず、動きが止まる。

その事態の中、いち早く歩の身に起こったことを理解した信哉が飛びつくように歩に近寄る。

その姿を見た愛理も椅子を蹴飛ばすようにして歩に近づく。

「オイ！？ どうした步ッ！？ 返事しろ！」
「歩君！？ しっかりして！」

信哉が気を失った歩の肩を掴み揺さぶるが反応がない。
舌打ちをして携帯に手を伸ばそうとした信哉の動きが止まる。
何故か？ 簡単だ。止めた人間がいたからだ。

「少し、黙りなさい」

リン、とした声が響き、信哉と愛理、二人に引つ張られるように
ざわめき出した生徒全員も黙り、止まる。

彼女が自己紹介をした時も起こった現象が再びここに起こる。

これは誘惑テンプレーションといい、天使のみが使える技術の一つである。

耐性、というか霊力の無い者の思考をごく短い時間のみだが奪い
去ることが出来るというものだ。

「はあ……、しょうがないわね」

本当にしょうがない、そんな体ていで溜息を一つ吐いて歩を床に寝か
せる。

「このまま死なれちゃ目覚めが悪いしね」

「……おいおい、コイツ何でこんなに衰弱してんだよ？」

先程まで自分の席で怯えていたリオが事態の深刻さに髪を掻きな
がら歩の側まで歩いて来る。

だが、アンナとの距離を微妙に取っていることから彼がどれだけ
アンナのことを恐れているか知れるというものだ。よく見れば足も
若干笑っている。

アンナはそのリオの様子を一瞥して目を細める。その視線を受けてリオは思いきり顔を引きつらせる。

アンナは視線を再び歩に戻すと、その頬を撫でる。

「この子、『蟲』に憑かれてるわね。否、違うわね憑かれてた、かしら?」

「……………何だと? そんな気配は」

「恐らく、依存型じゃないわね。それに気配を消すのが上手い。近くにいてもほとんど匂いがしないわ」

驚愕を露にした様子のリオの言葉を途中で遮り、アンナが歩の目の下に出来ているクマを見て顔をしかめる。

「……………匂いつてアレか? 例の甘い匂いつてやつ」

「アンタは? ……ああ、この馬鹿が世話になってるわね」

「ああ、気にしないでくれ。親父の相手をしてもらって助かってる」

自分の席についたまま事態を静観していた志雄が不穏な空気を察知してリオの近くまでやってくる。

「もしかしてアンタ、『蟲』のフェロモンを判別できるの?」

「…ん、まあ、薄っすらとだが」

「……………呆れた靈力の高さね。まあいいわ、話は終わり」

アンナはそこで話を区切り、いつの間にか取りだしたヘアゴムで髪を束ねる。

「何をするんだ?」

「……………黙っとけ、殺されるぞ」

志雄は突拍子も無いその行動の意図が分からず、隣のリオに聞こうとするが意味の分からない返答に顔をしかめる。

「悪いけど、アンタに選択の余地は無いわよ」

アンナは気を失っている歩にそう宣言すると、顎をつまむ。そして、自らの顔を近づけ歩の唇に己の唇を重ねた。

「……………あ。え……………？」

教室に静寂が落ちた中、未だに事態がよく飲み込めていない志雄の間の抜けた声だけが響いていた。

「……………あれ？　ここは何処だろ？」

歩が目覚まして最初に目にしたのは真っ白のカーテンと天井であつた。

起き上がり、辺りを見てみると、どうやらここが保健室のベッドの上であることがわかった。

「ようやく目を覚ましたわね」

視線の先のカーテンが開き、その向こうから見慣れない金髪の女生徒が歩いて来る。

歩の目が点になる。

目を覚ましたら保健室にいて、知らない、しかも今まで見たこと

もない程綺麗な外人がいる。

……え、と。夢？

ぼかんとした様子の歩を尻目に、その女生徒はベッドの横を通り過ぎると、白いカーテンを開き、窓も開け放つ。

瞬間、風が室内に吹き込み、女生徒の腰ほどまである長い金髪を掻き乱す。

その金系の如き金髪が陽光に照らされ、その一本一本が輝いているような錯覚すら感じさせる。

余りに非現実的で幻想的なその様に歩は毒気を抜かれた様子で呆然としている。

「体の調子はどう？」

「え、えと。あれ？」

急に質問された歩はしどろもどろに答えようとして自らの体の変化に気付く。

朝、あれほど気だるかった体が軽いのだ。

自分の腕や足を触って驚いている様子の歩に満足したのか、女生徒は軽く笑みを浮かべ、立ち上がる。

「はい、これ」

「え？ あ、ありがと」

「じゃあ、もう少し寝てなさい」

「ちよ、ちよっと待って」

女生徒が備え付けになっている冷蔵庫から常温よりもやや冷たくなっているミネラルウォーターを歩に渡し、その場から立ち去ろう

とするが、歩に呼び止められる。

「……君は、だれ？」

歩の質問に女生徒は眉根を寄せるが、合点がいったのか納得した表情になる。

「そう、そうね。私は」

女生徒はそこで言葉を切る。

その顔には数万の軍勢を相手にして、尚、嗤う勇者のように、不遜で、ふてぶてしくて、不敵な笑みが浮かんでいる。

「私は天使よ」

今一度、室内に風が吹き込み、長く、美しい天使の髪を撫でた。

第四話 「私は天使よ」(後書き)

- 1 ・花粉症がひどいです……。軽くムスカ様状態です。
- 2 ・本題。とりあえず書いた物を即投稿です。誤字とか発見出来次第、直したいと思います。
- 3 ・感想・評価・指摘など頂けると力になります。

第5話 「死体……遺棄？」

保健室を出た金髪の女生徒 アンナはドアを閉めるなり思い切り溜め息を吐いていた。

らしくない、と。

「……言っちゃまってよかったのか？」

保健室の横の壁に寄りかかっていた黒髪の男子生徒 リオが開口一番、責めるようにアンナに問いかける。

「あんな世迷いごと、信じてなんかないわよ。……それに、近いうちにはバレるわよ」

「……近いうちに？」

眉を寄せて首を傾げるリオにアンナがどこからともなく取り出した封の開いた便箋を指で弾いて飛ばした。

「これは……ってオイ、マジかよ？」

「大マジよ。偶然か必然かは知らないけどね」

「それにしたってお前……」

便箋の中身を見て思い切り顔をしかめているリオは同じような顔をしているアンナを見て口をつぐむ。

直感的にこの話題をこれ以上つづいてはいけないことを理解したのだ。

まして自分は天使の皮を被った鬼を怒らせていたのだ。ちょっと

機嫌を持ち直している今の状態をいたずらに悪化させる必要はない。それに、もしかしたら誤魔化せるかもしれない。

「ま、まあいい！ 展開が変わったら教えてくれ」

逃げるように、それでいてその心境を悟られないようにゆっくりとアンナに背を向け、その場から立ち去ろうとしたリオだが、後ろから聞こえたアンナの声に

「アンタまさか、このままあなたで誤魔化せると思ってるの？」

走って逃げ出していた。

「あ、あの」

「ん？」

逃げ去っていくリオの背中を目を細めて見ていたアンナに、長身のアンナから見れば頭一つ二つ小さな女生徒が緊張しきったような顔をして話しかけてきた。

自分の知っている人間ではない。

当然だ。人間界にもこの学校にも来たばかりなのだから。と、すれば、若干怯えながらもこの女子が話しかけてきた理由は一つだろう。

「あの子なら中よ。さっき目を覚ましたから会いに行っておけばいいわ」

「え！ …あ、ありがとうございます！」

詳しい内容も聞かずに要点だけ伝えられたその女生徒は一瞬、驚いた顔をしたが、すぐさま破顔し盛大にお辞儀をした。

頭の上で結つてある髪もつられて盛大にお辞儀をしてる姿に、アソナの顔に自然と笑みが浮かぶ。

それと同時に自らの中に言い知れぬ感情が沸き上がってくるのに気付いた。

…母性本能とかいうものだろうか？

何となしにそんな思考に辿り着いたが、それが自分に最も縁遠そうな感情であることを知っている彼女は溜め息を吐いてゆっくりとその場から立ち去った。

如月歩は困惑していた。

何に戸惑っているのかと問われれば、妹の友人である女の子がぶつ倒れた自分のことをやたら甲斐甲斐しく世話してくれていることとか、それを見ていた保健室の先生が勘違いして冷やかしてくるとか、そこに妹がミサイルよろしくで突っ込んできて場が更に混沌としてきたとか、たぶんそう答えるだろう。

しかし、一番混乱しているのはあの転校生のことであった。

(誰なんだろう？ つか名前も忘れてる僕って…)

彼女がクラスで紹介されていたのは何となく覚えているのだが、名前がどうにも思い出せない。

しかも、だ。

「天使、か……」

「どしたの、お兄ちゃん？」

いなくなった彼女が残した言葉を反芻していると、ベッドの上で

暴れていた優がピクリと反応する。

ちなみに彼女が暴れているのは兄たる彼の寝ているベッドの上である。

「はっ！ まさか、私のことを天使と間違えたとか！？ イケませんわお兄様！ 実の兄弟でそんな…ぶはっ」

「見慣れた顔を誰かと見間違えるわけないだろ。それにどんな妄想してるんだ…」

俄然、暴れまわるスピードを上げた優に歩はシワが寄ってしまった掛け布団を被せて立ち上がりストレッチを始める。

「もう立つても大丈夫なんですか？」

「うん、体の方は良くなつたみたいだからもう大丈夫だよ、南ちゃん」

ストレッチを終え、優を掛け布団の中に丸め込み、出られないようにしている歩に見舞いに来ていた南が心配そうに声をかける。

「ごめんね、南ちゃん。わざわざ昼休みまで来てもらって…」

「いつ！ いいんですよ、そんなこと！！ 私が勝手にやったことです！」

「そか、じゃあありがとう、だね」

慌てた様子の南に笑いかけて歩はハンガーに掛かっていたブレザーを手にとる。

ちなみに優は ちなみに優は掛け布団にぐるぐる巻きにされてうめき声をあげている。

「だいぶ寝ちゃったな……。午後からはちゃんと授業に出ないと」

よし、と掛け声をかけて自分に気合いを入れる。

現在は昼休み。歩が保健室に担ぎ込まれたのが一時間目が始まる前、一度目を覚ましたのが二時間目の終わりである。

丸々四時間を棒に振ったことを心から後悔している辺り、彼がいかに真面目かを現している。

ぐるぐる巻きの妹をそのままに、その友達に声を掛け、いざ外に出ようと保健室のドアを開けたとき、飛んできたのは

「寝とけって言ったのが聞こえなかったのかしら？」

氷のように冷たい声とラリアットであった。

再び意識を闇に返した（物理的にだが）歩を見て信也は隣にいた愛理とともに頬をひくつかせる。

「い、いくらなんでも、いきなりってのは酷いんじゃないかな……？」

「こつでもしなきゃこの真面目人間、おとなしく寝ないでしょ？」

またぶつ倒れるよりは何倍かマシよ」

まあ今ぶつ倒れたけどね、と言いたい気持ちを抑えて信也は保健室を見渡すと啞然とした顔をしている南とベッドの上で蠢く謎の物体を確認し、瞬間的にベッドの上のものは無視することを決めた。

「久しぶりね、南ちゃん」

「…………… あっ、はい！ お久しぶりです、不動先輩！」

昏倒している歩の頬を左右に伸ばしながら目覚めないことを確認していた愛理は、硬直したままの南に声を掛ける。

それを聞いてようやく意識を取り戻した南が慌てたように返事をかえず。

「だーからー、愛理でいいって言うてるのに。……って本当に目を覚まさないわね。大丈夫なの……?」

「ならその手を離したらどうだ? うっ血してる気がするが……」

割と本気でつねっているのに一向に目を覚ます気配のない歩に愛理もさすがに語尾を濁らせる。が、それでも頬を掴んだ手を離さない愛理に信也がぞつとしないといった様子で忠告する。

歩の親友たる信也が昼休みになってようやく来たのにはわけがある。

本当は授業を抜け出しても様子を見に行きたかったのだが、アンナにその行動を事前に止められたのだ。

『黙って寝かせときなさい。無闇に様子を見に行つて目を覚ましたらアイツはまた頑張ろうとするわよ?』

と言われ何も言い返すことが出来ずに今に至る。

それでいて、彼女自身は二時間目の終わりに何食わぬ顔をして様子を見に来ているのだからさすがである。

とはいえ彼女は自らが行った接吻を通した霊力の治癒がうまく機能したか確認しなければいけなかったのだが。

誤算といえば歩の記憶に一部欠損が出たことや、彼を慕う人間が

予想以上にいて、尚且つその全員が意外とアグレッシブだったことくらいだ。

「まあ、目を覚まさないなら好都合ね」

「何が……って、何？ ソレ？」

「何って見てわからない？ 麻袋あらいくろよ」

アンナが突然にどこからともなく取り出した農作業用の麻袋の使用意図がわからずに信也は更に困惑する。

「……や、まあソレが麻袋なのは知ってるけどさ」

「詰めるのよ、コイツを」

当然、といった様子で断言したアンナに一瞬、室内にいた全員の動きが止まる。

「死体………遺棄ってこと？」

室内を不気味な沈黙が占拠していたなか、それを打ち破ったのは愛理のそんな一言であった。

第5話 「死体……遺棄？」（後書き）

小説全体の文章変更などをやってみましたが、少しは読みやすくなったのでしょうか？

それと、何話か前の後書きに書いた短編の話ですがどうやら短編で済みそうにありません（汗

ので、本編終了後のおまけ的な話にしようかと思っています。

……まあ、本編自体が何時終わるのか謎なわけですが（爆）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9461c/>

僕と天使と

2010年10月10日13時55分発行